第 820 回学内演奏

音楽の経済的な力

ウィーンの劇場の歴史から考える

現代では経済的に自立が難しいとされるクラシック芸術も、それが創造された当時は経済的に決して弱い存在ではなかった。舞台芸術も、人々の欲求に幅広くこたえるための社会経済的しくみが整えられれば、実はその力を発揮できたのである。そうした、現在の私たちが気づきにくい舞台芸術の可能性を、歴史的な発想で考えてみたい。今回は特に、モーツァルトらが活躍した 18 世紀後半ウィーンの劇場（演劇・オペラ）を具体例として、舞台芸術の社会経済的な特徴を考える。

～プロフィール～

大塩量平　Oshio　Ryohei

早稲田大学政治経済学部卒、同大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学（2019 年、博士[経済学]取得）。現在、立命館大学経済学部准教授として、西洋経済史を担当。専門は近代オーストリア社会経済史。特に 18 世紀ウィーンの舞台芸術や劇場を対象に、ヨーロッパの文化芸術と社会経済の近代化との関係を歴史的に研究。